

●竹は一本一本は独立しながらも、同時に地下茎の広いネットワークで繋がっているところに、生命力の強さの秘密があります。目に見えない繋がりによってそれぞれの命が活かされているという点では人間という存在も同じです。では、果たして私たちを繋ぐものは何なのでしょうか。

●コロサイの教会にはギリシア人、ユダヤ人、スキタイ人といった異なる民族、また奴隷や自由な身分といった異なる立場の人たちが集っていたようです。そのような「違い」がある時に、私たちは往々にして互いに張り合い、壁をつくり、関係が断絶してしまいます。そこで聖書は「憐れみの心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を…そして愛を身に着けなさい」と勧めます。この「身に着ける」の原語は「着せてもらう」という意味合いを持っています。聖書には神さまが罪を犯したアダムとエバに「いちじくの葉」を与え、その恥を覆い隠されたと言う出来事があります。聖書において「服を着せる」と言うことは、神様からの赦しや憐れみを受ける出来事です。

そして「これら全てに加えて、愛を身に着けなさい。愛はすべてを完成させる絆です」と述べられています。この「きずな」(シンデスモス)は異なるものを結び合わせる「帯や紐」を意味する言葉です。これは私たちの歩みの一つ一つはイエスキリストの愛という帯で完成するという意味と同時に「愛の絆こそが、この世において人と人とを結びつけるのだ」という意味があります。

●私たちは自らが完全だと思ったり、自分の力で生きていると思う時には、孤立してしまい、むしろ自分は不完全だ、消えない痛みや弱さがあると落ち込む人に神さまは、人の痛みを我が事のように捉える優しい心や、人と人との愛の絆を与えてくださるのではないのでしょうか？そして、同じ痛みを持つ者達との連帯、この世の全ての苦痛を味わわれた主イエス様との連帯と一致を与えて下さいます。

●私たちは皆、様々な弱さや痛み、いつ倒れてもおかしくないような脆さを持っています。各々が努力してしっかりと立とうとすることも大切ですが、それ以上に自らの力では立ち得ないものである事を認め、互いに神さまの憐れみと愛を受けながら繋がり合うところに教会の価値があります。

本日は「修養会」を開いて、互いに覚え合い、祈り合い、愛し合う交わりを深めます。

「互いに愛し合いなさい…それによってあなたがたが私の弟子であることを皆が知るようになる」(ヨハネ 13:35)。と言う言葉にあるように、私たちがさらに愛によって固く結ばれる共同体となることで主を証してまいりましょう。